

赤十字 NOW

千葉 | March 2012 Vol. 21

発行所 / 日本赤十字社千葉県支部 〒260-8509 千葉市中央区千葉港5-7 TEL 043-241-7531 FAX 043-248-6812

全国初 日赤救護班 × 海上保安庁特殊救難隊

うみ ぎる いざ 海猿と 海難救護出動!



巡視艇で海難事故現場に急行
支部連絡調整員と特殊救難隊



事故遭難船からの負傷者搬送

2012年1月 イタリア沖で豪華客船の座礁海難事故が発生し、多くの尊い生命が失われました。日本においても海上レジャーの普及や、船舶の高速化などからいつ海難事故が起きてもおかしくないといわれています。

このような状況を受けて、小雪の舞う2月16日(木)、日本赤十字社千葉県支部では千葉市沖での海難事故を想定した千葉海上保安部との合同海難救助訓練を行いました。

折しも海上保安庁特殊救難隊員の活躍を描く人気映画「BRAVE HEARTS 海猿」がこの夏公開されます。海難救助のプロフェッショナルと、日赤の医療ノウハウが連携する海難救護に今後ご注目ください。(第2面に詳細記事)

CONTENTS March.2012 vol.21

2 国内救護レポート

・洋上災害に備え
全国初の合同訓練実施

3 イベントレポート

・日赤×千葉県立美術館
「東日本大震災記録写真展」開催

4 海外救援レポート

・希望の光と医療をウガンダに
・平成23年度「海外たすけあい」ご報告

5 news

・義肢製作所のプロモーションDVDが完成
・全国初! 貧血を防ぐメニュー・レシピ集が完成

6 お知らせ

・平成24年度赤十字活動資金へのご協力お願い
・書籍のご紹介「わたしの中の赤十字」

“乗客 50 人の旅客船が千葉市の稲毛沖で他船と衝突し、多数の負傷者が発生”

日本赤十字社千葉県支部（以下、「千葉日赤」と）と千葉海上保安部（以下、「千葉海保」）は、小雪舞う厳寒の平成 24 年 2 月 16 日、海難事故を想定した合同救助訓練を千葉中央ふ頭内貿易揚場岸壁で実施しました。日本赤十字社と海上保安庁の2機関が合同で訓練を行うのは全国初のことです。

海難事故をめぐっては、今年 1 月 13 日にイタリア沖で約 4,200 人を乗せた豪華客船が座礁し、多数の死者・行方不明者を出し、その恐ろしさがクローズアップされたばかりです。日本においても、毎年 2,000 隻以上の船が衝突や乗揚げなど何らかの事故に遭遇しています。

千葉日赤は、こうした事故が発生した場合の医療救護活動を強化しようと、平成 22 年 11 月 26 日、千葉海保と業務協定を結びました。

海上災害が発生した際、海保が日赤救護班や救護資機材、救援物資を現場まで輸送するなどの協力体制をとります。

今回の訓練は、この連携を確認するものです。千葉日赤救護班は、海保の巡視艇「いそかぜ」で事故現場に急行し、海保の特殊救難隊が救助した負傷者に洋上でのトリアージ（治療優先順位の選別）や救護活動を実施しました。

一方、ふ頭でも巡視艇の着岸ポイントにdERU（移動式仮設救護所）を設置し、エアータントの救護所を設営。傷病者が運びこまれると二次トリアージの後、応急処置や後方医療機関への搬送手配などを行いました。

千葉海保の警備救難課・林一馬課長は、「実際の海難事故の現場は、片道 3 時間くらいかかるところが当たり前にあります。それでも、私たちが現場でできることは、救命士による薬剤の投与など限定された処置だけ。それを補う日赤の医療には期待しています。海保の機動力と日赤の医療、お互いの長所を生かした業務協力を今後も行っていきたいですね。」と展望を語ります。

千葉県はここ数年、海難事故全国ワースト1という状況におかれています。千葉日赤と千葉海保では、業務協定に基づく海難事故における救護活動のみならず、平時での海難事故防止啓発活動を行うなど、協働で「生命と健康を守る」活動に鋭意取り組んでまいります。



海難事故発生!船上で待機する特殊救難隊

日本全国の海難事故をカバーする36人の精鋭部隊



事故遭遇船内に乗船した救護班

揺れと狭隘（きょうあい）と闘い医療を施します



業務協定締結（平成22年11月26日）



巡視艇「いそかぜ」に救護班乗船

緊迫の洋上救急の開始



救護資機材を担ぐ救護員（看護師）



次々と運び込まれる負傷者
（応急救護所内）



重症者は医療機関に搬送されます

東日本大震災記録写真展

～赤十字の救護・救援活動の記録～

好評開催
しました

昨年(2011年)の3月11日、マグニチュード9.0という我が国がかつて経験したことのない巨大地震と大津波は、東北から関東に至る沿岸部に壊滅的な被害をもたらしました。

津波は多くの人々の生命や未来を奪い、日本中を悲しみに包み込みました。

未曾有の震災から1年。「震災を忘れない、風化させない」をコンセプトに、千葉県立美術館の熱意に満ちたご協力の申し出によって実現した東日本大震災記録写真展。

日本赤十字社職員などが撮り続けてきた膨大な量の記録写真から107点を厳選し、震災直後～医療救護～赤十字ボランティア活動～復興へ向けてと4つのストーリーを白黒写真とカラー写真で表現しました。

会期中は、日本赤十字社が常備する各種の救援品などの展示や、応急救護所のディスプレイ、特殊救護車両の展示、赤十字奉仕団員による災害時炊き出しの実演など、様々なアトラクションを設けました。

また、美術館ではお馴染みのギャラリートークには、救護員として被災地域に派遣された当支部職員が救護活動体験を報告するなど、展覧会の期間を盛り上げました。

平成22年5月に共催した「日本赤十字社所蔵美術展」がご縁で開催した今回の写真展には、1,700人を超える方々が来場し、約400枚の復興を願うメッセージが寄せられました。

これらのメッセージは、日本赤十字社宮城県支部に託され、被災地域の復興を応援します。



▲美術館製作のチラシ

東日本大震災記録写真展の概要

- 主 催:日本赤十字社千葉県支部 千葉県立美術館
- 会 期:平成24年2月14日(火)～2月19日(日)(6日間)
- 会 場:千葉県立美術館 第6展示室(千葉市中央区中央港1-10-1)
- 展示写真:本社・千葉県支部・成田赤十字病院職員などが撮影した活動記録写真107点

写真パネル等協働製作



▲パネル貼り



▲パネル切り



▲千葉県の花「菜の花」をモチーフ
応援花作り(メッセージ記入用)



▲たくさんの応援花が
咲きました

共同展示作業



会場ディスプレイ



写真展フォトストーリー

写真展会期中



▲写真に見入る人たち



▲義援金募金の様子



▲応急救護所展示コーナー



▲それぞれの思いを託していただきました



▲写真の前に赤十字職員が救護体験を語る
ギャラリートーク



▲千葉市赤十字奉仕団員
による炊き出し実演

希望の光と医療をウガンダに 成田赤十字病院 浅香朋美医師が切り開く 国際救援への道

成田赤十字病院の浅香朋美医師（外科・整形外科）が、日本赤十字社が取り組むウガンダ共和国における病院支援事業のスタッフとして事業に参加。内戦からの復興途上にあるウガンダの人々に希望の光を灯しました。この紙面では、東日本大震災救護活動に気持ちを残しながら、昨年4月2日、ウガンダに旅立った浅香医師の活躍をクローズアップします。



▲奇跡的に戻ってきた少女とともに



▲現地の若手医師とともに

事業の背景

東アフリカのウガンダ共和国は、2008年まで約20年に及んだ内戦からの復興と開発の途上にあります。紛争後、多くの人々が避難キャンプから元の村々に帰還し、平常の生活を取り戻そうとしています。ウガンダ共和国政府は、国民の生命と健康を守るため、人材を含む保健医療インフラの整備に努めていますが、とくに内戦の被害が最も大きかった北部では質・量ともにニーズに追いついていません。そこで、日本赤十字社は、2010年4月から医師を派遣し、北部の病院支援に取り組んでいます。ハイチ大地震の救援の経験をもつ浅香医師は、2011年4月から9月末までの約6ヶ月間、同国アゴコ県カロンゴ郡にあるアンボロンソリ医師記念病院（345床）において、患者の外科治療とともに、地元の若手医師の指導と育成にあたりました。



▲汗だくで行う外科系手術

医療事情や現地慣習との闘い

派遣先の病院には外科専門医師が不在。浅香医師は現地スタッフとともに、341件の外科系手術をごなしました。衛生環境は日本の医療施設とは雲泥の差があり、室温30度を超える中、医療器具や衛生材料も極度に不足する条件下での医療は想像を絶します。「資材不足は深刻で、手術用のゴム手袋と絆創膏で人工肛門を作ったことも」。浅香医師は苦闘を語ります。「祈禱師が民間療法を行う現地の慣習にも悩まされました。打撲や捻挫などの怪我をするとその部位に熱湯をかけるのです。医学のエビデンスが全く通用しない世界に直面しました。結果は火傷になってしまう。傷口にうさぎの毛を付けるという民間療法もあり、本当に驚きました。」



▲溢れる笑顔に囲まれて（病院敷地内井戸端）



▲新生児を連れた母親たち

差し始めた光を感じて

感染症で全身に膿（うみ）が広がり、死に直面した少女との出会いが忘れられない。母親は祈禱師の診断を受けさせたいと退院を希望。浅香医師は、根気よく説得を続け、祈禱師の治療に効果がなければ再入院の約束を取りつけました。半ばあきらめかけていた2週間後、奇跡的に母親に連れられて少女は病院に戻ってきました。その後、抗生物質の投与などの治療で回復した少女は、自力で歩けるようになりました。派遣期間終了間際の出来事であったため、少女の退院を見ることができません。「必ずまた来てね。プレゼントを用意して待っているから。」という少女の言葉に勇気づけられながら着いた帰路、空港に向かう車を少女の母親が追いかけてきました。「ありがとう ありがとう」を繰り返し、懸命に大きく手を振る彼女の姿を見たとき、こみ上げてくる感動に浅香医師は、このミッションは正しかったと確信したそうです。



▲イラクからメールと写真が送られてきました
左から2番目が浅香医師 ~元気で活躍しています~

新たなミッションへ そしてイラクへ

ウガンダでのミッションを終えた浅香医師は、現在北イラクに派遣されています。今年1月から約2ヶ月間、日本赤十字社の行う北イラク戦傷外科実地研修で医療技術を磨いています。実地研修では、イラク北部の救急病院において、現地スタッフとともに、銃や地雷などの武器による外傷（戦傷外科）患者の治療などに従事しています。将来、国際赤十字の要請に応じて世界各地の紛争地域で医療活動に従事できるように、外科医としての現場での実践力の向上も目指しています。「いろいろな経験を積んで、多くの生命を救いたい」。浅香医師ははたっりと微笑み旅立ちました。

平成23年度「海外たすけあい」へのご協力ありがとうございました

「海外たすけあい」は、海外での災害や紛争による被災者の支援および開発途上国への長期的な支援を行うために、日本赤十字社が毎年NHKと共同で実施している募金キャンペーンです。

平成23年度「海外たすけあい」は、昨年12月1日（木）から25日（日）まで実施され、この間、多くの皆さまのご協力により、全国から寄せられた寄付金は、約5億3,384万円。うち日本赤十字社千葉県支部における寄付金の受付総額は、484件174万1,677円※となりました。

※郵便振替（日本赤十字社取扱分）による寄付分を除く

今回ご協力いただいた寄付金は、世界187の国と地域の赤十字のネットワークを生かし、アフリカやアジアで紛争や自然災害に苦しむ人々の救援活動や開発協力事業に活用させていただきます。皆さまからのご協力に心から感謝申し上げます。

～新たな一歩のために～

義肢製作所プロモーションDVDが完成しました

日本赤十字社が運営する社会福祉施設の中で、唯一義肢（義手・義足）・装具を製作する当支部義肢製作所。

その特色ある業務内容から、福祉推進団体や小・中学校から、たくさんの方の見学、職場体験の申込みをいただいています。

このたび、義肢製作所では、より多くの皆さんに義肢製作所の業務を知っていただくために、紹介用のDVDを制作しました。

当支部義肢製作所の利用者であり、交通事故で両脚を失うという、想像を絶する過酷な経験乗り越えてきた、脇本富美子さんと箭本佳広さんにご出演にご協力いただきました。

お二人のインタビューから始まる本編は、義足との出会いが新たな生活に結びつき、現在のご活躍が丹念に描かれています。また、義肢製作所が誕生した歴史や、義肢、補装具の製作過程などをわかりやすく紹介する10分間の構成となっています。

視聴をご希望の場合は、ご遠慮なくお問い合わせください。

■お問い合わせ先:総務課広報戦略係
Tel 043-241-7531 (代表)



▲脇本さんが義足を装着し散歩するシーンを撮影



▲ご自身の経験を語る脇本さん



▲オープニング映像を撮影
税理士事務所でご働く箭本さんがご協力

全国初 貧血を防ぐメニュー・レシピ集が完成! ～日本赤十字社社内広報コンテストで最優秀賞を受賞した自信作～

このたび、千葉県赤十字血液センターでは、低ヘモグロビン量によって献血にご協力いただくことが出来なかった方を対象に、食生活から貧血予防に取り組んでいただき、更に献血再チャレンジにつなげていただくことを目的に、「貧血を防ぐメニュー・レシピ集」を作成しました。

このレシピ集は、成田赤十字病院栄養課長が考案・監修したもので、千葉県特産のピーナッツを使用した酢和えや、ひじき入りペペロンチーノなど、様々なメニューが掲載されています。気になるカロリーや蛋白質、鉄分などの栄養構成も掲載。

苦手なレバーを使用したハンバーグもお勧めです。もりもり食べて、ご自身やご家族の健康管理や、献血にもお役立ていただければ幸いです。

このレシピ集をご希望される方は、県内各地の献血ルームや献血会場の血液センタースタッフまでお気軽にお問い合わせください。

■千葉県赤十字血液センターへのお問い合わせは
Tel 047-457-9926(ダイヤルイン) 企画課
献血ルームに関する情報は、同センターのホームページ
<http://www.chiba.bc.jrc.or.jp>をご確認ください。



人間を救うのは、人間だ。 平成 24 年度 赤十字活動資金へのご協力お願い



東日本大震災で多くの生命を救う救護活動に、全組織を挙げて取り組んだ日本赤十字社。「そこに、守りたい命がある。」
職員や活動に携わる赤十字ボランティアが胸に秘め被災者支援活動を続けてきました。
災害救護をはじめ、国際活動、赤十字救急法など救命技術普及など、私たち赤十字に寄せられる期待と要請は多岐にわたります。
今年11月16日に創立120周年を迎える日本赤十字社千葉県支部では、様々な取り組みを通じ、これからも人の生命と健康、尊厳を守る活動を続けてまいります。
引き続き、活動資金のご支援で赤十字を支えてください。

お問い合わせ先 **総務部振興課**
(しんこうか) **Tel 043-241-7531 (代表)**

※郵便振替でご支援いただく場合は、手数料は免除されます。
郵便窓口を設置してある振替用紙をご利用の場合、特殊取扱欄に「免」とご記入ください。

口座番号：00190-7-57587
加入者名：日本赤十字社千葉県支部

◀多くの生命を救った石巻赤十字病院スタッフ
日本赤十字社広報特使 藤原紀香さんを起用したポスター

書籍のご紹介



日本赤十字社「もっとクロス!」
応援プロジェクト編 B6判 160頁
価格 1,200円 (消費税込)
※送料は別途必要です。

ご購入を希望される方は、直接(株)日赤サービスまでお申込みください。
(ご照会・ご注文は) (株)日赤サービス Tel:03-3437-7516 (図書担当)
<http://www.nisseki-service.com/>
または



(注) まとまった数量をご希望の場合は、(株)PHP研究所でもご注文を承ります。
Tel:075-681-1295 又は同社WEBサイトをご利用ください。
(注) 書店での取扱いはありません。

「わたしのの中の赤十字」 ～静かに広がる熱い感動～

昨年秋に出版された「わたしのの中の赤十字」。
赤十字の事業に携わる日本赤十字社の職員やボランティアの皆さんが、それぞれの体験や、赤十字への思いを綴った珠玉のエッセイ集です。決して派手な本ではありませんが、読者の皆さんから心温まる感想が寄せられています。この紙面では、田所由香さん(千葉県浦安市)からの感想をご紹介します。

「私の中の赤十字」を もっとみんなの中に。 浦安市赤十字奉仕団 田所由香

東日本大震災では、浦安市の86%が「液状化」。家は傾き、道路・上下水道・ガスのライフラインが壊れ、都市型の災害として甚大な被害を受けました。

わが奉仕団は1ヶ月間おにぎりを作り続け、街頭募金も行ってきましたが、通常の活動ができるようになったのは秋以降です。

私自身も被災者となり赤十字の見舞金を受けました。そんなところ、「私の中の赤十字」に出会いました。生死に向き合う厳しい現場があり組織があり、人がいる。そんな体験談が淡々とまとめられています。

上品なイラストは本が伝えようとしている人間の温かさを表現していました。

私は感銘を受け、年の暮れに延期されていた社員募集活動では、元気に自信を持って市内を回る事ができました。

「どのような時代にあっても、赤十字に寄せられる信頼を裏切ることなく、けれど、それに萎縮することなく」という近衛社長の手記にあるように、赤十字の活動を支えているという自覚と勇気をこの本からいただきました。

是非、大勢の仲間に読んでほしいと勧めているところです。